

「材料・技術の観点から見た在来的な建築構法の推移 -エチオピア・ティグレ州を事例として」

政策・メディア研究科修士課程 (EG/EI) 清水信宏

■研究内容・目的

対象地域は、東アフリカに位置する内陸国であるエチオピアの北部・ティグレ州とする。古代アクスム王国以来からの伝統的な構法の要素を受け継ぐ、対象地域における伝統建築に着目する。地に由来する石材や木材といった「材料」、教会建築・邸館建築・伝統住居といったタイプを持つ「建築そのもの」という双方の切り口から、言い換えれば「どのように建築が造られてきたのか」「どのような建築が造られてきたのか」という双方の切り口から、以下の点を明らかにすることを本年度の目的とする。

- ・ 対象地域における建築の「伝統」を構法的な見地から整理する。
- ・ 建設プロセスや利用されている材料から、社会的環境や物理的環境がどう伝統構法そのものに関係しているかを明らかにする。
- ・ 対象地域に 19 世紀後半に建設されたヨハネス 4 世王宮の建築史的な位置づけを明らかにする。
- ・ 19 世紀から 20 世紀に建設された邸館建築において、どのように伝統的な建築構法を継承・改変を見いだすことができるか明らかにする。

■活動内容

2012 年 6 月から 8 月にかけて、フィールドワークが対象地域において行なわれた。そこでは以下の 2 種類の調査が行なわれた。

伝統建築建設のロジスティクスに関する調査

帝政末期における職人経験を持つ 6 人の職人へのインタビュー調査。建設プロセスや材料調達といった側面に着目した調査。

「ティグレ公家の邸館建築群」のアーカイビング調査

「ティグレ公家の邸館建築群」という筆者の作成した枠組みを構成する建築のうち、7つの敷地に散らばる 11 の建築について行なわれた実測調査。

これら 2 つの調査に加えて関連する研究のレビューを行なうことで、目的に挙げた点の解明を行なっていく。

■結果・結論

本年度の活動を通じて明らかにした内容の詳細についてはここでは触れないが、大きく見れば以下の点が見いだされる結果となった。

「どのように建築が造られてきたのか」から

- ・ 対象地域において、石材が入手容易なものであるのに対して、木材は入手困難なものである。
- ・ 対象地域の建築の「格」として、木材の利用度や装飾性、そしてその精度は重要な役割を果たしているものと考えられる。
- ・ エチオピア帝政期の封建的な社会構造は、建設事業に動員できる労働力そのものとも関係しているものと考えられる。

「どのような建築が造られてきたのか」から

- ・ 19世紀後半建造のヨハネス4世王宮は、ティグレ地方の教会建築の「伝統」（すなわち格の高い建築の伝統）を多く継承する形でその建造がなされている。
- ・ 一方で同王宮には対象地域の「伝統」とは異なる要素も存在している。対象地域の外にあるエチオピア皇帝前王宮の「伝統」の継承、外国人大工の存在がその理由として考えられる。
- ・ 対象地域において19世紀から20世紀の帝政期に建設されたその他の邸館建築においても、総じて対象地域における建築の「伝統」がディテールも含めた意味でよく継承された。

■今後の発展の可能性

- ・ エチオピアおよびアフリカ地域における建築都市史に関する学問的前進。
- ・ アーカイビングから、保存修復あるいは建築の活用といった実践への展開。
- ・ 発展途上国における、文化的側面を内包した開発のあり方についての検討。

■活動成果

修士論文の執筆

「エチオピア・ティグレ州における建築構法から見た伝統の継承と改変 ～「ティグレ公家の邸館建築群」の建築史的アプローチから」

学会発表

Nobuhiro Shimizu, Hiroto Kobayashi, Riichi Miyake “Hypothetical Study on Intention of Making City of Mekelle, Ethiopia”, Inter-University Seminar on Asia Megan Cities 2012, 2012